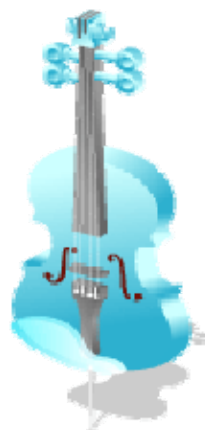


—北海道立図書館北方資料室所蔵資料展—

北の作曲家 を振り返る

～北海道の音楽遺産～



会期：平成 19 年 3 月 1 日 (木) ～ 4 月 30 日 (月)

場所：北方資料室展示ホール

【開催にあたって】

北海道では古来、アイヌ民族の人々により築かれた伝統文化が深く根付く一方で、道外からの和人の渡来を契機とする新たな混合文化の発展が見られました。ハイブリッドな文化活動の形成を背景に、独自の芸術が生成されました。

今回の展示では、多様な芸術ジャンルの中でも北海道出身の作曲家の業績と足跡を振り返りながら、彼らの創造力の源を探る試みを企画しました。

なお、紹介する人物については北海道出身、かつ現在当館に所蔵資料がある人々に限定しました。

I 管弦楽曲、歌曲、合唱曲

1 伊福部昭（いふくべ・あきら 釧路市 1914～2006）

因幡（鳥取県）東部の豪族であった伊福部家は代々、宇部神社の神官を務めていたという名門の出である。その重圧から逃れるため、父・利三は明治半ばに北海道に移住してきたが、彼はその三男として釧路で生まれた。警察官吏だった利三は後に音更村村長となったが、この時、アイヌ・コタンに出入りし、アイヌの人々の生活に触れることになった昭の経験から生まれたのが作品「シンフォニア・タプカーラ」（1954）や「アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌」（1956）である。これらは何れもアイヌ文化の影響が強くて出ている作品で、“タプカーラ”とはアイヌの踊りの一種である。

早坂文雄や後の武満徹と同様、音楽については独学であった彼は北海道大学農学部を卒業後、太平洋戦争後まで林務官として勤務していたが、当時作曲はあくまでも副業だったというのに、在学中からすでに作曲家として国際的な名声を得ていたというから驚きである。

2006年に91歳で逝去したが、東京音楽大学学長なども勤めた。

開拓期における北海道では、先住民族アイヌと道外各県から移住してきた和人が融合し、一植民地的な文化混濁が見られたが、彼が幼少から慣れ親しんだこの開拓期文化の受容経験こそが、後の青年時代にストラヴィンスキー、ファリャなどに傾倒する素地ともなった。

洗練された格調性とは無縁ながらも、バーバリズム、原始的な生命賛歌、民俗的舞踏といった要素が伊福部作品に通底する音楽的特徴である。また、西洋的な調性からの開放やソナタ形式の否定なども特質として指摘される。

北海学園大学教授ともなった長兄宗夫は、『沙流アイヌの熊祭』（みやま書房 1969 当館所蔵 請求記号 ア. 1-1）を著すほどアイヌ文化への造詣も深かった。

北海道との関係では、上記「シンフォニア・タプカーラ」のほか、「北海道讃歌」（1961）＜HBC交響楽団によって初演＞、ともに更科源蔵の詩（アイヌ伝説）を元にしたアイヌ民族の悲哀が込められた頌歌「オホーツクの海」（1988）や「摩周湖」（1992）、開町70周年を記念して作曲された「音更町歌」（1970）などの楽曲があり、枚挙にいとまない。

ソプラノ歌手で学術（音楽）博士号を取得している藍川由美も積極的に伊福部の歌曲を歌唱しているし、近年はNaxosレーベルから上記「シンフ

「オニア・タブカーラ」などを含む「日本作曲家選輯」CDがリリースされ、国際的に20世紀の日本の作曲家が注目されてきているようである。

なお、音更町図書館では、伊福部自身に関する資料（楽譜、研究書など）のほか、コンサート等のポスター・ちらし・プログラム、CD・レコード・ビデオ）、また、師弟（芥川也寸志、黛敏郎、矢代秋雄、池野成、松村禎三、三木稔、石井真木など）や交友のあった人々（早坂文雄＝作曲家、佐藤忠良＝彫刻家、船山馨＝作家、三浦淳史＝音楽評論家など）に関する資料を収集する「伊福部コーナー」を設置（2005～ ）し、一般利用者に公開している。

【展示資料】

<図書>

- (1) 『伊福部昭 音楽と映像の交響楽（上・下）』（小林淳著 ワイズ出版 2005 請求記号 762.1-I)
- (2) 『伊福部昭の宇宙』（富樫泰〔ほか〕著 音楽之友社 1992 請求記号 762.1-I)
- (3) 『私のなかの歴史 7』（北海道新聞社編・刊 1987 請求記号 281.08-W-7)
- (4) 『日本映画音楽の巨星たち 2 伊福部昭／芥川也寸志／黛敏郎』（小林淳著 ワイズワイ出版 2001 請求記号 762.1-Ni-2)
- (5) 『音楽家の誕生／タブカーラの彼方へ』（木部与巴仁著 本の風景社 2004 請求記号 762.1-I)
- (6) 『伊福部昭の映画音楽』（小林淳著 ワイズ出版 1998 請求記号 778.2-I)
- (7) 『伊福部昭・音楽家の誕生』（木部与巴仁著 新潮社 1997 請求記号 762.1-I)

<雑誌>

- (8) 『釧路春秋 53号』（釧路文学団体協議会 2004）p34～57
※ 特集：「2004年から眺める釧路の作曲家と音楽家について」
→ 明治より現代まで、釧路地方における音楽文化の起源や伊福部を初めとする作曲家の業績などが詳細に紹介されている。
- (9) 『季刊・ゴーシュ 2006夏号』（季刊ゴーシュ編集委員会 2006）
p6～7
※ 特集：「追悼・伊福部昭」

2 早坂文雄（はやさか・ふみお 仙台市 1914～1955）

仙台市生まれ。父の家は宮城県志田郡の地主だったが、やがて斜陽するに伴い、一家は1918年に新天地を求めて札幌に移った。4歳で札幌に移住しているため、ほぼ北海道出身といえよう。幼少時より経済的な困窮を経験し、高校進学も断念した。札幌のカトリック教会でオルガニストを務めたり、ラテン語や神学を習得する機会も得た。早坂もやはり独学で作曲を始めたが、後に同年齢の伊福部昭と知り合い、以後親交を結ぶ。

武満徹に師と崇められた早坂は日本独自の民族的イデオロギイを映画音楽の世界に持ち込み、日本映画音楽の水準を世界的なレベルに高めた功績により評価されている。

早坂が担当した代表作としては、黒澤明監督作品の「羅生門」（1950）、「七人の侍」（1954）、溝口健二監督作品の「山椒大夫」（1954）などが名高い。とりわけ「七人の侍」では、ワーグナーがその楽劇に多用したことでも有名なライトモチーフの導入を試みた。

北海道との関係では、晩年の代表作ともいえる「交響的組曲 ユーカラ」（1955）があるが、これは描写的な音楽ではなく、アイヌ神話を抽象化することにより東洋を表現した作品である。この作品が初演された4か月後に、彼は結核のため夭折することになった。汎東洋主義の音楽を標榜し、東洋的「無の感性」を音楽へと結晶させる努力を推進した彼の音楽的探求は、後の若い世代の作曲家（佐藤勝・武満徹・芥川也寸志・黛敏郎ら）に継承されることになる。

【展示資料】

<図書>

- (1) 『黒澤明と早坂文雄 風のように侍は』（西村雄一郎著 筑摩書房 2005 請求記号 778.21-Ku）

※ 伊福部昭についての伝記、評伝などは多数出版されている一方、早坂文雄の才能や作品の質の高さを考慮すれば、あまりにまとまった資料が乏しい現状にあった。しかし、早坂没後50周年にあたって、黒澤明の研究者、また、音楽評論家としても有名な著者が6年の歳月を費やして完成させたこの大著により、伝説の作曲家・早坂文雄の実像が明かされている。

- (2) 『日本映画音楽の巨星たち 1 早坂文雄／佐藤勝／武満徹／古関裕而』（小林淳著 ワイズ出版 2001 請求記号 762.1-Ni-1）

(3)『昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽』（秋山邦晴著 みすず書房 2003 請求記号 762.1-Sh）

(4)『札幌と音楽（札幌市教育委員会編 札幌市 1991 請求記号 081.2-Sa-57）

3 佐藤勝（さとう・まさる 留萌市 1928～1999）

1951年国立音楽大学卒業。佐藤勝は早坂文雄の弟子で、黒沢明監督作品「用心棒」（1961）〈米国アカデミー賞ノミネート〉、「天国と地獄」（1963）、山本薩夫監督作品「戦争と人間」（1969）など多くの映画音楽の作曲を担当した。故・黒沢明監督の遺稿を映画化した小泉堯史監督作品「雨あがる」（1999）は彼の遺作（通算308本目）となった。多作かつ幅広いジャンルでの音楽活動を行った。

北海道との関係では、故郷の北海道留萌市に依頼され高校のブラスバンドのために作曲した「北の序曲」、「札幌オリンピック」（1972）、また、留萌市「海のふるさと館」映像展示のために作曲した「留萌の海へ」などもある。

【展示資料】

〈図書〉

- ・『記録・佐藤勝』（「記録・佐藤勝」を創る会 2006 請求記号 289-Sa）

4 間宮芳生（まみや・よしお 旭川市 1929～ ）

旭川市出身だが、育ちは青森市である。旭川とは異質な東北の「土着性」に触れる。東京芸術大学作曲家卒業。管弦楽曲、室内楽、合唱曲の他、HNK大河ドラマやドキュメンタリー映画の主題曲なども作曲している。映画や「火垂るの墓」（1988）の主題曲も間宮の作品である。

間宮はバルトーク、ヤナーチェクなどの作曲家同様、民俗音楽の要素を芸術音楽に取り入れるという行為を通じて自らの音楽語法を確立しようとした。民族音楽学の分野でユニークな音楽研究及び音楽活動をした個人・団体の業績を顕彰するため、1989年に制定された「小泉文夫音楽賞」第12回（2000年度）受賞。

近年では、創作浄瑠璃「菅江本奥じゃうるり 其の二一蝦夷下北篇 しほひかり」が東京・国立劇場で上演された（1998）ことが記憶に新しい。

この作品は、江戸時代の旅行家・菅江真澄が30年に渡って北海道や東北の庶民の生活を記録した日記をもとに間宮により台本と作曲が書かれたもので、浄瑠璃の語りとアイヌ民族の伝統舞踊など郷土に伝わる歌や舞踊が盛り込まれている。前年に上演された「其の一」は、菅江が東北地方を一巡して、蝦夷地に渡るところまでの話で、続編の「其の二」は、道南地方と青森県の下北地方の道中を描くもの。

【展示資料】

- ・『現代音楽の冒険（岩波新書）』（岩波書店 1990 請求記号 S760.4-G）

5 上元芳男（かみもと・よしお 長沼町 1912～1996）

札幌の合唱団「メールクワイアー」を初め、道内各地に合唱団を設立、合唱指揮者としても活躍したように、生涯を合唱の普及に捧げたことでも知られる。1950年には北海道合唱連盟を創設し、初代理事長となった。

22歳から始め道内各地の小中高校、専門学校の校歌作曲は、トータルで100曲以上にもなる。

旧制小樽市立女子商業学校教諭、同市立朝里中校長、余市西中校長、札幌静修短期大学教授などを歴任。在職中の33年間を小樽、積丹周辺で過ごし、特別にこの地域には愛着を持っていたようである。

生前“自然や人から受けた鮮烈な思い出が残る地域を取り上げて、北海道を表現したい”と語っていた上元だが、晩年肝臓がんと闘いながら作曲（作詞とも）を遂行・完成させた3部作が「北の譚詩曲（バラード）」である。「オホーツク」、「積丹」、「えりも」の3部で構成されているが、何れも北海道の風土を題材としている。

【展示資料】

<図書>

- (1)『余市豆本 第2集8号 まなびやの歌』（西村雄一郎著 余市豆本の会 1993 請求記号 O81.2-Y-2-1）

※ 上元が校歌を作り始めた経緯、作詞、作曲する上での注意点などが書かれてあり、校歌づくりにかけた情熱をうかがい知ることができる。
上元と余市豆本の会 前田代表は、1927年に北海道教育大学に入学した同期生で、前田代表が上元に執筆を依頼したものである。

- (2) 『野ばらの来た道』(坂西八郎著 響文社 2005 請求記号 767-No)
- ※ シューベルトやヴェルナーを初め、多くの作曲家がゲーテの詩「野ばら」に付けた91曲の楽譜が収載されているが、日本人唯一の作品として上元の「野ばら」が紹介されている。
- (3) 『探求の歩み 上元芳男著作選集』(馬場敏明著 1996 請求記号 760.4-Ta)
- (4) 『詩集 メサージュ』(上元芳男 北書房 1985 請求記号 911.568-Ka)

6 柳田孝義 (やなぎだ・たかよし 札幌市 1948～)

高校卒業まで札幌で過ごす。武蔵野音楽大学大学院終了。現在、文教大学教育学部教授。

北海道の自然に繋がるスケールの大きさと上質で気品のある世界を描いた「雅楽」などがある。

【展示資料】

<図書>

- ・『星の仔馬』(柳田孝義作曲 友田多喜雄作詩 河合楽器製作所出版事業部 1995 請求記号 767.6-Ho)

II その他(歌謡、邦楽等)

1 八洲秀章 (やしま・ひであき 真狩村 1915～1985)

真狩村泉地区の開拓農家の次男として生まれた。故郷に残した初恋の相手、横山八重子(18歳で死去)とその戒名から取ってペンネームとした。八洲が彼女への思いを短歌に託し、作詞家・土屋花情(つちや、かじょう 本名:清 1913～1990)に依頼した歌詞に八洲が作曲した「**さくら貝の歌**」(1939)は殊に有名である。その後9年間知られなかったが、山田耕筰がこの曲を気に入り、後にNHK「ラジオ歌謡」で取り上げ、小川静江の歌で広く親しまれるようになり、これを機に以後山田耕筰の弟子となる。現在、鮫島有美子を初めとする多くの歌手に歌い継がれている。

八洲はその後、「**あざみの歌**」(1949)、阿寒湖に伝わるアイヌ娘

と下僕との悲恋をテーマとした曲「マリモの歌」（1953）＜安藤まり子〔北見市出身、1929～〕の歌唱で名高い＞などの曲のほか、交響詩「開拓者」（1968）＜北海道庁による本道開道 100 周年委嘱作品＞などの楽曲の創作によって昭和の歌謡史、音楽史に足跡を残した。

なお、子息は劇団四季のミュージカル俳優の沢木順である。

【展示資料】

＜図書＞

- (1) 『さくら貝の歌 八洲秀章の生涯』（下山光雄編著 真狩村 2003 請求記号 289-Y)
- (2) 『北国に光を掲げた人々 第2集（北海道青少年叢書2）』（北海道社会教育協会編 北海道科学文化協会 1983 請求記号 281-Ki-2)
- (3) 『地域の文化 27号』（北海道地域文化保存振興協会 2002）P
※ 特集「北海道の生んだ日本の作曲家 八洲秀章」
- (4) LP『交響詩 開拓者』（指揮：八洲秀章 演奏：北海道交響楽団 ビクターレコード 1968)

2 飯田三郎（いいだ・さぶろう 根室市 1923～2003）

根室生まれ。戦後、根室市出身の作詞家、高橋掬太郎とのコンビによる「ここに幸あり」に続き、次々とヒット曲を発表した。ミサ曲やオラトリオなど宗教音楽の作品も多くあるが、根室を愛し、根室のために多くの曲を残した。

代表曲としては交響組曲「北国讃歌」（1968）があり、これは根室市の開基100周年記念のために作曲されたものである。

現在、根室市図書館2階にある飯田三郎資料展示室には、飯田三郎の代表作「ここに幸あり」の自筆楽譜などの資料が展示されている。

【展示資料】

- ・『根室市博物館開設準備室だより No.18』（根室市博物館開設準備室 2003）p31～32
- ※ 根室市図書館所蔵の飯田三郎作曲レコード一覧が記載。

3 梁田貞（やなだ・ただし 札幌市 1885～1959）

梁田貞は開拓使本庁の官舎で生まれた。東京芸術大学では声楽を学んだが、後に音楽教育と作曲に転向した。

童謡から歌謡曲まで数多くの曲を残し、大正から昭和初期の“日本歌曲の創成期”に活躍した作曲家で、叙情的な作風により大衆の心をつかんだ。

【展示資料】

- ・『音楽の師 梁田貞「城ヶ島の雨」「どんぐりコロコロ」の作曲者』（岩崎呉夫著 東京音楽社 1981 請求記号 289-Y）

4 牧野昭一（まきの・しょういち 樺太泊居町 1927～ ）

名曲「赤いグラス」（1965）の作曲家で、北海道をこよなく愛し、現在は中標津に在住して作曲活動に専念している。

「嗚呼（ああ）御巢鷹山」は、1985年の日航ジャンボ機墜落事故で妻を失った知人の詩に牧野昭一が曲を付けた。この原曲をもとに同事故で失った日本人の父親の鎮魂のために捧げられた曲が「エレジー」で、バイオリニストのダイアナ湯川が2001年に札幌コンサートホールで披露した。標津への郷土愛に満ちた歌詞が地元の女声合唱団「グリーンフレンズ」らによって叙情的に歌われた「標津讃歌」（1999）などの曲がある。

【展示資料】

<図書>

- (1) 『赤いグラスのいい出逢い』（牧野昭一著 総合企画 1997 請求記号 914.6-Ma）
- (2) 『サハリンへ愛をこめて』（牧野昭一著 チタン 1991 請求記号 F-Ma）

<雑誌>

- (3) 『月刊 新根室』（総合企画）

※ 現在、毎号に「作曲家 牧野昭一のフリートーク ピアノ・フォルテ」を連載している。

5 桑山真弓（くわやま・まゆみ 美唄市 1931～2001）

アコーディオン奏者、作曲家。1952年に北海道放送（HBC）に入社し、同局専属のバンド「HBCリズムスターズ」などのリーダーを務め、本道の音楽文化の基礎を築いた。

1965年には独立し、自身の音楽事務所を設立した。第13回（1962）“さっぽろ雪祭り”には一般公募された詩に作曲した「雪まつりの歌」、「網走ブルース」、「石北峠」などの歌謡曲約1,000曲を作曲した。その他、「静内ばやし」、「大滝百年太鼓」など郷土芸能、校歌、CMソング、郷土芸能のための曲など、幅広いジャンルの曲を手掛け、多くの作品を生み出した。

音楽の指導にも熱心で童謡唱歌を歌う会を発足させたのをはじめ、多くの団体の育成にあたり、音楽の普及・発展に尽力するなど、本市の芸術文化の振興に貢献した。

【展示資料】

<図書>

- ・『北海道の旅情歌 桑山真弓作品集2』（桑山音楽事務所 1981 請求記号 760.8-Ku）

6 宮川泰（みやがわ・ひろし 留萌市 1931～2006）

大阪学芸大学音楽科卒業。弟・宮川彪、長男・宮川晶も作曲家。代表作は、ザ・ピーナッツの「恋のバカンス」、「ウナセラディ東京」、映画音楽ではクレージーキャッツ出演のシリーズ作品など。

【展示資料】

- ・『サウンド解剖学』（宮川泰著 中央公論社 1981 請求記号 767.8-Sa）

7 唯是震一（ゆいぜ・しんいち 深川市 1923～ ）

箏曲作曲家。幼少より琴の自作自演をしていたという。東京芸術大学出身。芸大時代はデビュー曲「神仙調舞曲」や「箏とオーケストラのための小協奏曲」などの作曲で邦楽コンクールの入賞を重ねた。北海道百年記念に作った「合奏組曲石狩川（春、夏、秋、冬）」は、子供時代の風景を

念頭に作曲した作品である。春夏秋冬 4 つの情景を、それぞれ琴や尺八奏者約 100 人で合奏、四季を通した演奏で計 400 人余りが参加する。この作品は唯是が、幼少からあこがれていた雄大な川に未来への希望を託した大曲である。

【展示資料】

- (1) 『私の半世紀』（唯是震一著 1981 請求記号 289-Y）
- (2) 『神仙調舞曲 続・私の半世紀』（唯是震一著 1988 砂小屋書房 請求記号 289-Y）
- (3) 『神仙調舞曲 続々・私の半世紀』（唯是震一著 1992 砂小屋書房 請求記号 289-Y）

—北海道立図書館北方資料室所蔵資料展—

北の作曲家を振り返る

～北海道の音楽遺産～

発行日 平成 19 年 3 月 1 日

編集 北海道立図書館北方資料部

発行 北海道立図書館

〒 069-0834 江別市文京台東町 41 番地

TEL 011-386-8521

FAX 011-386-6906